研　究　成　果　報　告　書

令和８年　　２月　２７日

１．所属・職・氏名　等

文学部英文学科　講師　堤博一

２．研究課題（テーマ）名

日英対照による統語・意味インターフェース研究

３．研究期間

2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日

４．利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金　　100,000 円

５．研究の概要

本研究は、生成文法および形式意味論に基づき、統語構造と意味解釈の結びつき（統語・意味インターフェース）を、日英対照および関連領域のデータから検討することを目的とする。とりわけ今年度は、(A) 日本語の態度文における de re 解釈と照応（「自分」「彼」）の相互作用、(B) 日本語の等位項移動が示す再構築効果（作用域）と反再構築効果（条件 C）という非対称性、という二つの理論的課題に取り組み、既存分析の再検討と新たな分析提案を行った。

これと並行して、(C) 第二言語習得研究として、英語の非能格／非対格自動詞の非対称性が日本語母語話者の英語中間言語にどのように反映されるかを、判断実験データに基づいて検討した。理論研究と実証研究を並行させることで、統語理論に基づく一般化が、(i) 自然言語の意味解釈事実の説明にどのように寄与しうるか、(ii) 習得された中間言語文法にもどの程度現れうるか、という二つの観点から研究を行った。

６．研究成果等

① 態度文の de re 解釈と照応：res 移動 分析と 概念生成子分析の比較

信念動詞補部節に現れる記述的名詞句に埋め込まれた「自分」「彼」の照応可能性を観察し、de re 信念文の分析として、res 移動分析 (Heim 1994, 1998) と概念生成子分析 (Percus and Sauerland 2003) を比較した。本研究における「自分」「彼」の照応現象に関する観察は、res 移動分析ではなく概念生成子分析によってのみ説明が可能であることを示し、経験的に後者の分析が優位であることを論じた。これにより、日本語の照応データが態度文意味論の理論選択に直接的な含意を持つことを明確化した。

② 等位項移動と再構築：義務的（作用域）再構築と反再構築効果（条件 C）の共存

日本語における等位項移動が、解釈に与える効果を、量化子の作用域と代名詞照応の両面から検討した。その結果、(i) 量化子を含む等位項が移動しても作用域は拡大せず、移動元で作用域が与えられる義務的再構築が観察される一方で、(ii) 条件 C に関しては移動後の構造のみが決定的であり、移動前の構造は関与しない反再構築効果が生じることを示した。さらに両者を同一文で同時に満たすデータを示し、同一移動対象に対して「義務的再構築」と「反再構築」が共存しうる点を根拠に、再構築に対する意味論的アプローチ（痕跡の意味タイプ分析）の必要性を論じた。

③非対格／非能格動詞の非対称性と中間言語文法

英語の非対格／非能格区別を、UTAH 等の理論的前提に基づく UG の帰結と捉え、日本語母語話者の英語中間言語において当該の非対称性がどのように現れるかを判断実験で検討した。具体的には、過剰他動化および過剰受動化を含む非文法的語順の文において、非対格動詞が非能格動詞よりも相対的に許容されやすいという既知の傾向の再検証と、過剰受動化が過剰他動化を前提とするかという仮説の検討を行った。その結果、非対格／非能格での非対称性は確認された一方、過剰受動化と過剰他動化の関係については予測どおりには支持されず、L1 の転移（間接受動等）の代替要因を含めた今後の課題を整理した。

7．研究の実績（論文・発表　等）

論文

1 Tsutsumi, Hirokazu (2026) Anaphora and Attitudes *De Re*: Evidence from *Zibun* and *Kare*, *JELS* 43.

2 Tsutsumi, Hirokazu, Takayuki Kimura, and Takaaki Hirokawa (2026) “The Role of UG and the Unergative/Unaccusative Asymmetry in Interlanguage Grammar,” *Proceedings of the 50th annual Boston University Conference on Language Development.*

3 堤博一（2026）「日本語の等位項移動と再構築効果について」、『英語英文学論集』54 号。

発表

1 堤博一（2025）「「自分」と「彼」の照応から見た de re 信念文の分析」、日本英語学会第 43 回大会

2 Tsutsumi, Hirokazu, Takayuki Kimura, and Takaaki Hirokawa (2025) “Unergative/Unaccusative Asymmetry in the Interlanguage of Japanese Learners of English: An Argument for UG Constraints in L2 Acquisition,” The 5th International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics.

3 Tsutsumi, Hirokazu, Takayuki Kimura, and Takaaki Hirokawa (2025) “The Role of UG and the Unergative/Unaccusative Asymmetry in Interlanguage Grammar,” The 50th annual Boston University Conference on Language Development.